

2021年7月29日 全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会 提案

対象に思考をめぐらせ、自己を理解するツールとしてのICT

例年、全国の附属幼稚園が参集する研究会は

今年度はオンラインで実施されました。

本園は第1分科会「新しい生活様式の中での幼児教育におけるICTの活用について」において提案しました。

これからの学校教育を支える基盤的なツールとして、

ICTはもはや必要不可欠なものである。

中でも幼児教育においては

「幼児期は直接的・具体的な体験が重要であることを踏まえ、ICT等の特性や使用方法等を考慮した上で、幼児の直接的・具体的な体験を更に豊かにするための工夫をしながら活用する」ことが求められている。

(文部科学省(2021)「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申))

そこで本提案では、探究・表現のツールとしてのICT活用事例において、子どもが対象に思考をめぐらせ、自己を理解していった子どもの学びについて考察した。

実践1 | どうしてそこが「お庭」だと思うのか？  
—自分を振り返って探究する(5歳児/小1/小2)

どうして自分はこの写真で切り取った場所が「お庭」だと思うのだろうか。A児が活動を重ねる中で見出したのは

「お庭は自ぜんがあつて、お庭は、リレーが一番になって、すながすきになったから。」

幼稚園時代に繰り返し友達と一緒にリレーに取り組み、そこで泣いたり笑ったりした経験が自分の「お庭」の概念を形成していたことに、写真や異年齢の友達との対話の中で気づいていった。

何處築山の写真を撮影しても納得いかないB児。ついに「僕はこれが好きなの！」と言って築山を転がる表現は、B児にとってはただ築山が「お庭」なのではなく、そこに楽しく転がり落ちる楽しさのイメージもセットで「お庭」であったことを探究した証だった。

小1  
5歳児

実践2 | 自分にとっての「幼稚園」を表現する  
—「好きなお庭 どここだ？」(3歳児)

「自分の好きな場所をおうちの人に見せてあげたい！」という子供の思いから立ち上がったプロジェクト「好きなお庭どここだ?」。幼稚園に入ることのできないおうちの人に向けて、自分の好きな場所を自分でiPadで撮影し、自分の言葉で語る子供の声を編集し、動画にして家庭に配信した。(T:教師 C/D:子供)

T:Cさんの好きな場所を教えてください。  
C:この、おすなが、せんぶあるから、みんなであそべるのがたのしいから。  
T:そう！  
教えてくれてありがとう。

T:Dさんの好きな場所、教えてください。  
D:おやまです。  
T:なんでおやま、好きなの？  
D:のぼりたいからです。  
T:そっか！  
教えてくれてありがとう。

「写真」の特性

「保育者の専門性と写真に関する記号論的考察」(2021)  
写真のもつ特性に注目し、保育に活用される写真について記号論的に考察

- 意味を含むメディアとしての写真
- 写真の開放性
- インデックス性  
(写真が現実の痕跡であるという記号的性質のこと)

松田登紀(2021)保育者の専門性と写真に関する記号論的考察・日本保育学会 第74回大会発表論文集

年齢で優劣がつかず、教師も答えをもたない「お庭」というコンセプトで探究する中で、子供達は写真というメディアを通して対象に思考をめぐらせ、自己理解を深めていった。また異質な他者である異年齢の友達との対話は、写真を見る人の経験によって写真の捉えが異なるという写真の開放性をより活かすこととなった。

C児は、3歳児専用ではなく、全園児共用の砂場を選び、「みんなで遊べる」ことの喜びを表現している。そして、入園してしばらくは緊張から教師の傍を離れられなかったD児は、今は自分で行きたい場所に行ける喜びを、築山に実際に登った自分の足元を撮影していることで表している。ICTを活用することにより、一人一人の子供が園を自分の居場所としていること、園での経験や思いがメタファーとして写真と言葉で表現されることがわかる。

両事例では、子供の豊かな表現を豊かなまま対話につなぐ道具としてICTを活用したことで、子供自身の自己理解も深まっていった。両事例を支えているのは、以下の2点である。

- ・子供と大人が対称な関係であるように互いを尊重し、子供スタートのカリキュラム・マネジメントにより子供も教師とともに主権者であるというマインドセットを育むことを意識すること。
- ・写真というメディアは撮影者が撮影する時点においてすでにひとまとまりの意味を含むことなど、ICTの特性(教材性)を意識した上で手段として活用すること。